様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年 １０ 月　 ５ 日現在

機関番号：３１３１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2015
課題番号：２３５２０９９４

研究課題名（和文）森林資源の利用技術としての畑作と野生動物の管理に関する民俗環境史的研究

研究課題名（英文）A study of folklore and environment history on field crops and management of wild animals as the utilization technology of forest resources

研究代表者
岡　惠介（OKA, Keisuke）

東北文化学園大学・その他の研究科・教授

研究者番号：９０３０１６９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,100,000円

研究成果の概要（和文）：北上山地山村では、自給的な部分の大きい生計維持活動が森林環境を改変し、焼畑や畑、採草地、放牧地、薪炭林として利用されてきた。これらの変化の過程を聞き取り、観察、文献により調査した。この結果、山村の周辺で生物多様性が維持され、生計活動に再利用しやすい森林環境が形成維持されてきたことがわかった。
　北上山地でニホンジカ、イノシシが分布を拡大し、農林業被害が増加しつつある。しかしこれらは明治期には生息していた動物であり、生息域の再拡大である。かつての山村では、これらが衣食や道具等の資源として積極的に利用されていた実態を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In the villages on the Kitakami Mountains, livelihood maintenance activities which are in large part self-contained have transformed the forest environments, which have been utilized as burnt fields, fields, grasslands, rangelands, and fuelwood forests. A hearing survey was conducted on the process of the transformation, which was investigated with observation and literature. The result of the survey clarified that the biodiversity has been maintained around the villages and the forest environments easily reused for livelihood maintenance activities have been developed and maintained. Japanese deers and boars have expanded their distributions on the Kitakami Mountains, where damages to agriculture and forestry are increasingly serious. However,the animals who have inhabited there since the Meiji era, so it is a re-expansion of their habitat ranges. This survey revealed the fact that they had been actively utilized as the resources for clothing, foods, and tools in the mountain villages.

研究分野：民俗学

キーワード：森林資源　北上山地　焼畑　採草地　放牧地　野生動物保護管理　モンキードッグ　救助犬

１．研究開始当初の背景

（１）筆者はこれまで 30 年以上、北上山地山村の民俗生態史的な研究に取り組んできた。

とくに岩泉町安家地区をインテンシブに調査を続け、最近 150 年間の山村の民俗生態史的な変容過程を「視えざる森の暮らし」（2008 年　大河書房）にまとめ発表している。

このような研究で得られた、生業や環境利用における民俗知識、生態知とでも呼ぶべき北上山地山村に残されたフォークノレッジを、森林資源の利用技術という切り口でまとめ、今後の森林利用の基礎的資料として提供したいと考え、これが本研究をはじめる契機となった。

（２）特に北上山地山村の焼畑は、切替畑とも呼ばれ、放棄後に植林される例があって、アグロフォレストリィとしての性格を持ち、また森林の野生動物の焼畑への農業被害を防除するための狩猟活動が不可欠であった時代があったこと、またその野生動物が一時の絶滅寸前に見えた時期（昭和前期）から回復を見せ、生息域を再拡大し（昭和６０年代以降）、再び野生動物の管理の問題が顕在化しつつあることも、研究開始の背景にあった。

２．研究の目的

（１）高齢化が進行し疲弊する山村が、今、森林資源の過少利用時代を迎えている。北上山地の山村が、これまでどのように森林資源を改変して活用し、野生動物を資源としてどのように暮らしに取り入れ、被害の防除のための緩衝帯を形成していたかなど、山村の伝統的な民俗知識、生態知を集積して、今後さらに予想される野生動物による農業被害の増大に、いかに対処して共存を図るべきかを明らかにすることを目的としている。

３．研究の方法

（１）北上山地山村及び、その比較対象地となる東北地方の多くの山間地において、長期の現地調査（観察、聞き取り）を行った。

（２）東北地方県市町村及び大学の図書館、博物館、資料館や古書店において文献調査を行った。

４．研究成果

（１）森林を人里に改変する民俗技術についてヒアリングを進め、多くに事例を収集した。

例えば、毎年火入れを行って植生を草地の状態に管理する採草地は、山菜などの自給食料の採集地でもあり、凶作時には、焼畑耕作地や、救荒食であるワラビやクズの根茎採集地ともなる重層的な利用が行われおり、山村の環境管理 の技術としての、火入れの重要性が確認された。

また近年、近世や近代初期において、日本の山地は「はげ山」が多かったとされ、当時の森林資源の過大な収奪の象徴として述べられる傾向がある。

しかし北上山地山村のように、たとえ外見的には「はげ山」に見えるものであっても、それはまた森林資源の利用形態のひとつであり、環境破壊という批判は当たらないものである可能性を示唆できた。

さらに猛禽類などの繁殖には、こうした山中の開けた部分が森林内にあることが、捕食などのために必要であると考えられている。山村の放牧採草地を保持するための毎年の森林における火入れが、植生の多様性を生み、生物多様性の保持にも一定の役割を果たしていた可能性は、充分考えられる。

ここから、近世近代における「はげ山」の意義を問い直す必要があるのではないかと考えている。

（2） 畑、焼畑、採草地、放牧地、薪炭林など人里と、森林との境界ゾーンの管理については、ヒアリング・デー タを蓄積した。境界ゾーンにおいて、野生動物の侵入を防ぐ管理技術として除草が重視され、その労働は家族のうち高齢者によって担われる傾向があった。

また 焼畑では、人が管理できない時間帯には、沢に設置したシシ脅しで獣害の防除を行っていた。

（3）ニホンジカは、各調査地における林業労働者らからの聞き込みによって、昭和40～50 年代までは岩手県南の五葉山が北限であり、その生息域はこの周辺に限定されていた。狩猟者はシカを撃つために、わざわざこの地域に遠征していた。

しかし現在は、岩手青森県境を突破してさらに北上しつつある。少なくとも生息域の北限が約 50 年間で、直線距離にして100km 以上北上したことが明らかになった。

さらにイノシシも、かつては宮城県の南端を北限として生息していたが、現在はすでに盛岡市周辺まで、生息域を拡大しつつある。

実際には両者ともに、もともと明治大正期までは青森県北部の本州北端まで分布していた大型哺乳類であり、当時のこれらの食肉として、また薬や民具の材料としての利用を復元し、今後の地域での再活用の基礎資料とした。

これらの獣害防除が今後の地域にとって大きな課題となることは確実であり、本研究ではあとに述べる、使役犬の活用を提案している。

（4）岩手県庁の保存文書から、調査地安家地区を含む岩手県の明治期のオオカミ猟の実態が明らかになった。

明治 10 年代には数か年にわたって、安家のマタギが親子のオオカミを生け捕りにし、これが盛岡まで運ばれて、県からの補助金を得ていたなど、北上山地山村における二ホンオオカミの生息や狩猟実態に関する、多くの事実が明らかになった。

また、オオカミ猟の方法を図解した絵図を発見した。アイヌの仕掛け弓は知られているが、それ以外に国内で仕掛け弓罠についての報告は知られていない。

他にも毒餌、落とし穴、圧殺罠の両方も記述しており、全体として東北の狩猟関係の資料としてこれまで報告がほとんどなく、貴重である。

またその他の野生動物の狩猟方法についても記述があり、これらの猟法について、国内のこれまでの文献に記載されてきた猟法との比較を行うとともに、アイヌ他の民族間の比較の視点も踏まえながら、分析を進めているところである。

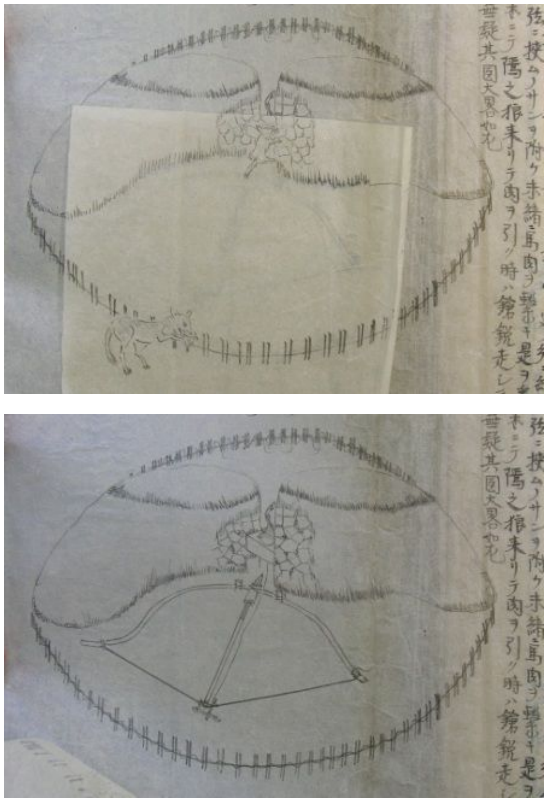

図 1　岩手における狼捕獲用の弓罠（岩手県庁保存文書より）

（5）ニホンシカの皮を中心とした商品化について、「岩手県管轄地誌」などから、多くの情報が収集されている。

また、南部藩政時代や明治期の岩手県の公文書に記録のある、ニホンオオカミに似たという「カセキ」という動物に関係すると思われる資料（根付）について専門家による鑑定を行い、岩手において明治以前に洋種大型犬が存在していた可能性があることが明らかになった。

（6）（2）、（5）に関係して、かつての山村では多くの家でイヌが放し飼いで飼われ、これが畑への獣害を防いできた側面があった。そこで当時のイヌ飼養と効果、その後の変容の過程について、集中的に聞き取りを行った。

また、現在の使役犬の獣害防除への応用形態であるモンキードッグについて、下北半島などで調査を進め、電気柵などと比べても非常に効果を上げていることが明らかになった。

ただし下北半島におけるモンキードッグの活用については、この地域のサルが「北限のサル」として特別天然記念物となっていることもあり、文化庁他からの各種の補助金を得やすく、モンキードッグの管理費や、ハンドラーの賃金など諸経費を賄いやすいという、他地域にはない条件も存在する。よってこの事例がすぐに、他の山間諸地域のモンキードッグの活用に適用できるわけではない。

今後のますます高齢化していく山村において、限られた人的資源の中で獣害の防除を行っていく際に、地域においてこうした使役犬の活用を図る施策を工夫して講じていくことの重要性が指摘できよう。

5．主な発表論文等

〔図書〕岡　惠介、大河書房、「山棲みの生き方　木の実食・焼畑・短角牛・ストック型社会」2016、264

〔その他〕

ホームページ等

http://akka-research.jp/

6．研究組織

（1）研究代表者

岡　惠介（OKA　KEISUKE）

東北文化学園大学・総合政策学部・教授

研究者番号：90301697